

# 保育内容「音楽表現」領域でのアクティブ・ラーニングで 学生が得た学びの活用

——発達センターZにおける特別なニーズを持つ子どもに対する  
「幼児音楽劇の共創」の実践から——

原 友美\*<sup>1</sup>・寺谷直輝\*<sup>2</sup>

## はじめに

2012年に中央教育審議会が発出した答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」では、学生が主体的に問題を発見し解を見出していく能動的学習（アクティブ・ラーニング、以下「AL」とする）を大学教育の中核として位置づけてから、その後急速にALを用いた大学の授業実践が蓄積されてきた。しかしながら、保育内容の「音楽表現」領域における近年の先行研究（例、古根川 2017、佐藤 2018）では、1教員による1授業の実践であるために、学生の長期的な学びが見えにくいことが課題として明らかになった。そこで、原・寺谷（2022）では、原が、保育者養成校であるX短期大学で行った「音楽表現」「保育内容（表現Ⅰ）」「基礎ゼミⅡ（前期）」の3科目を関連づけてALを用いた実践から、音楽表現に必要な技術、子どもの発達段階の理解、そしてアウトリーチ活動により、これまで得てきた技術や理解が深化したことを明らかにした。そして、課題として例えば、インクルーシブ保育の流れの中で障がいのある子ども等の特別なニーズを持つ子どもを排除しない保育内容・方法を構築し、アクティブ・ラーニングで得た学びが活用できるかどうかの実践・検証が必要となった。

本論文は、発達センターZにおける「幼児音楽劇の共創」の実践を手がかりとして、X短期大学に在籍している学生がALで得た学びを特別なニーズを持つ子どもへの保育にどのように活用したのかを明らかにすることを目的とする。なお、本研究における「幼児音楽劇の共創」とは、「自分の得意分野を活かし、共に力を合わせて創り上げ、そして、保育園や障がい児施設に出かけ子どもたちと交流し、創作した音楽劇を披

露する活動」と定義する。

本論文は、原・寺谷（2022）の継続研究の位置づけであり、本論で検討する「幼児音楽劇の共創」を実践する意義を以下に述べる。今日、インクルーシブ保育が志向されており、2012年に制定された「子ども・子育て支援法」においても、「水準は、全ての子どもが健やかに成長するように支援するものであって、良質かつ適切なものであり、かつ、子どもの保護者の経済的負担の軽減について適切に配慮されたものでなければならない」（第2条第2項、下線は筆者）と規定されている。したがって、学生が保育者として保育園や障がい児施設で勤務するときには、発達障がいを含む特別な教育的ニーズを持つ子どもも在園していることを前提として、どの子どもであっても必要とされる保育はどのように実現するのかといった実践課題が登場する。幼児期における実践研究を整理した別府（2014：27-33）によれば、子ども理解とアセスメント、遊びの発達の意義、障害の特性に着目した個別指導のみではなく、子どもの発達全体や生活・仲間関係も含めた理解、子ども一人ひとりの支援仮説を個別の指導計画を作成した上で実践へと導くことの有効性について述べられている。これらの課題を学生が「自分事」として捉える1つの方法として、実際に特別なニーズを持つ子どもたちと関わってみるというアウトリーチ活動があると考えた際、「幼児音楽劇の共創」の実践は十分意義ある取り組みである。

なお、本論は、はじめには寺谷、1・2・おわりには原、3は原・寺谷が担当している。

〈倫理的配慮〉

本研究は、個人情報および倫理面に配慮し行った。

また、発表と掲載については、X短期大学の学生、発達センターZの園長及び療育主任職員の同意を得ている。また研究にあたって利益相反関係はない。

## 1. 研究方法

筆者（原）が、20XX年度の後期に開講した保育者養成校であるX短期大学での「基礎ゼミII」における「幼児音楽劇の共創」で劇づくりに取り組む学生の様子、および、発達センターZで「幼児音楽劇」の上演、子どもたちと遊びを通しての交流後に学生に実施したアンケートを分析した。

## 2. 結果

### 2-1. 「幼児音楽劇の共創」で劇づくりに取り組む様子から

まず、学生たちは、3・4歳や大学生が演じた幼児

音楽劇を鑑賞して話し合いに取り組み、見る人には意外性があるストーリーが面白いのではないかという結論に至る。その後、発達センターZで実践を行うことが決まり、学生たちは、意外性があることから、「十二支の話」と「100万回生きたねこ」の話を繋げたストーリーにすると決め、タイトルを「ネコとゆかいな仲間たち」にした。表1は、その台本である。台本ができたところまで演じてみて、ビデオに撮って修正すべきところがあれば、皆で話し合って修正した。その中で、動物の雰囲気や特徴をとらえた被り物にすることや、動物に近い声で感情を込めて台詞を話すこと、小道具や舞台セットを多くするといった工夫をした。さらには、一方的に音楽劇を見せるのではなく、劇に出てくる動物で発達センターZの子どもたちがよく知っていると思われる動物の歌と一緒に歌える場面を設定した。

表1 『ネコとゆかいな仲間たち』の台本（ネズミに騙され、十二支に外れたネコが新たに旅に出て、様々な出会いを繰り返し100万回生きるお話である）

ナレーション	むかしむかし、動物好きの1人の神様がいました。
神様	元旦の朝、私の所へ1番早く来た動物から12番目の動物までは順に1年の間、動物の王にしてあげよう
動物	いいや、僕が1番だ
動物	私が1番よ
ナレーション	それを聞いた動物たちは自分が1番になると言って元旦の朝が来るのを待っていました。ところがネコは神様のところにいつ行くのか忘れてしまったのでネズミに聞きました。
ナレーション	ネズミはわざと1日遅れた日を教え、ネコは、ネズミが言ったことを信じて喜んで帰っていきました。
ウシ	おらは、歩くのが遅いんだ。だから皆より早く暗いうちに出かけるんだ
ナレーション	ウシが神様の所に着くとまだ誰も着いていませんでした。
	自分が1番と喜んでいてと門が開き、その瞬間、ウシの背中からネズミが飛び降りました。
	ネズミはチョロチョロと走り、1番になってしまいました。
	次に着いたのはウシでした。
ナレーション	そしてトラが3番目に着きました。
トラ	3番目か〜、1番が良かったなあ
ウサギ	4番かあ。もっと早く走れば良かったなあ
	<b>歌「うさぎ」</b>
ナレーション	次にタツ、ヘビの順にやってきました。そしてウマもやってきました。
ウマ	ヒヒーン
	<b>歌「お馬」</b>
ナレーション	そしてヒツジ、サル、トリ、イヌの順にやってきました。
ヒツジ	メリーさんと遊んでたら遅くなっちゃった
	<b>歌「メリーさんのひつじ」</b>
サル	山に帰りたいウキー 歌
	<b>歌「アイアイ」</b>
トリ	ピョピョしてたらコケコになっちゃった！
	<b>手あそび「コロコロたまご」</b>

イヌ	もうこんな時間かあ
	<b>歌「いぬのおまわりさん」</b>
ナレーション	それからイノシシの順番で着きました。 ネコは1日遅れで行ったので仲間に入れませんでした。 それでネコはネズミを恨み、今でもネズミを追い掛け回すそうです。
ナレーション	十二支の仲間入りできなかったネコは、くやしきのあまり旅に出ました。旅に出たネコは旅先でタマと名前をつけてもらいました。
タマ	僕はタマ！好きな食べ物は魚なんだ！
ナレーション	ネコのタマは、王様のネコになり、大切に育てられていました。それは動物好きの神様に会ってからのはじめてのことでした。
王様	タマおいで。よしよし
	<b>歌「こどものおうさま」</b>
ナレーション	しかし、タマは王様がすきではありませんでした。タマはだんだん弱っていき、ある日お庭で倒れているところを王様が見つけ、悲しみました。 タマはその後、お婆さんの飼いネコになりました。ますます弱り、散歩に行った帰りに道路で倒れていました。お婆さんはタマを可愛がっていたので悲しみに暮れました。 それからしばらくして野良ネコに生まれ変わりました。
タマ	僕はタマだよ！今まで100万回生まれ変わったんだ！
ナレーション	今まで100万回生まれ変わったことを自慢するとメスのネコたちは寄ってくるようになりました。しかし、1匹の白ネコはタマに興味を持ちませんでした。 タマは、その白ネコの興味を引こうと考えました。ボールで遊んだり、花をプレゼントしました。 タマは白ネコと一緒にいたいと思うようになりました。
ナレーション	そして白ネコに結婚のお願いをしました。
タマ	僕と結婚して下さい！
白ネコ	うん。いいわよ
ナレーション	タマは白ネコと出会うことによって、やさしい気持ちになれました。 時がたち、白ネコはたくさんの子ネコを産み、家族で幸せに暮らしました。 タマは初めて死にたくないと思いました。 タマと白ネコと子ネコたちは幸せに 100万年生き続けました。 <b>歌「てをたたきましょう」</b>

\*動物名はすべてカタカナで表記した。曲名は楽譜通りの表記とし、小林美実編(1975)『こどものうた200』チャイルド社、小林美実(1996)『続 こどものうた200』チャイルド社、小学校3年生共通教材を参考とした。

## 2-2. 「幼児音楽劇」の上演と遊びを通して子どもたちと交流した感想から

発達センターZでの「幼児音楽劇の共創」の実践や遊びを通しての交流後に、学生に、(1)子どもたちと交流した感想、(2)劇を上演してみた感想、(3)これらの経験を今後どう生かしたいかの3点を尋ねた。

(1)については、「子どもたちと関わってみて、一人ひとりの性格や特徴を把握することで興味のあるものを知ることができた」「言葉をうまく伝えられなくても、その子一人ひとりの顔の表情や「あー、うー」などの声で今楽しい気分だったり、これをやりたいっていう気持ちが伝わってきた」つぎに、(2)については、「子どもたちが楽しそうに見てくれたり、リズムに

乗ってくれたり歌ってくれたり、先生方も協力して下さったので劇をしやすかったし、楽しかった」「楽屋の中では、みんなが「次は〇〇ちゃんだよ」など声を掛け合って練習よりも何倍も声をだして歌を歌う姿があった。本番はとてもいい劇にすることができたと思う」そして、(3)については、「自分自身楽しむところは楽しみ、楽しいと思えることを子どもたちに伝えるように笑顔でいることを心がけたい。発達段階を理解して関わるようにしていきたい」「発達が遅れている、遅れていないに限らず一人ひとりの個性があり援助や支援の仕方が違うので、一人ひとりに合わせた関わり方ができるようにもっと頑張りたい」「私が保育士になった時、障がいが重い子や敏感な子たちがたくさん

いたら、その子に居心地のいい場所を作ってあげたいと思った」という回答が得られた。

### 3. 考察

はじめにで述べたように「音楽表現」及び「保育内容（表現Ⅰ）」で積み重ねられた学生たちの学びは、「基礎ゼミⅡ」でのアウトリーチ活動により顕在化されることになり、これらはALによる教育的効果と言える。そして、さらに、その学びは後期の「基礎ゼミⅡ」の「幼児音楽劇の共創」の実践にも見られた。学生が1年生だったころ、幼児歌曲の弾き歌いも数多くこなし、どんな動物が出てくる歌があるかを学んだ。



写真1 身近な物・廃材等で作成した楽器



写真2 「幼児音楽劇の共創」で使用した道具（ハイソックスに綿を詰めて）

表1の台本の中に出てくる「メリーさんのひつじ」「アイアイ」「いぬのおまわりさん」等である。「手あそび」も授業で2人ずつ組になって実践したので、この劇の中では「コロコロたまご」を子どもたちと一緒にに行った。また、「音楽表現」の授業では身近な物、廃材で楽器を作った（写真1）。そのことは、「ネコの耳やしっぽを作る」（写真2）という「小道具を工夫する」ヒントになった。「基礎ゼミⅡ」の前期に学生たちが作った楽器を保育園の子どもたちと一緒に奏でたが、そこで得た学びは「子どもたちの方をしっかりと見て」「知っている動物の歌を歌って共に音楽する喜びを分かち合う」ことへと発展している。また、実習もあって、メンバーがすべてそろうということにはなかったため、代役もこなせるように、自分たちでセリフが重ならないように役割を細分化しながらチームワークを発揮し学生同士が共に助け合い学び合う姿が見て取れた。

はじめにで述べた別府の実践課題に照らしてみると、まず、子ども理解とアセスメントという観点からは、学生が子どもの「あー、うー」という声を楽しくと捉えていたり、子どもがどのような感情なのかを理解しようと努めていた。つぎに、遊びの発達の意義という観点からは、「幼児音楽劇」上演後の遊びを通しての交流は、何かを目的とする遊びではなく、遊ぶことそれ自体を目的としており、さらには、子どもたちだけではなく、学生たちも楽しむことで相乗効果があったと考えられる。子どもの発達に対する理解については、「保育内容（表現Ⅰ）」では、子どもの発達段階を教員から学生に教えていたが、「発達段階を理解して関わるようにしたい」という感想文から、発達センターZの子どもたちと関わって発達段階を理解したいという主体性が誘発されたと考えられる。最後に、子ども一人ひとりの支援仮説については、個別の指導計画を見た上で実践は取り組まれていないものの、「発達が遅れている、遅れていないに限らず一人ひとりの個性があり援助や支援の仕方が違う」という感想文から、支援仮説は障害の有無や障害特性によるものではなく、一人ひとりの子どもによって必要とされる援助や支援が異なる仮説を立てることを体感したと考えられる。

なお、「私が保育士になった時、障がいや重い子や敏感な子たちがたくさんいたら、その子に居心地のいい場所を作ってあげたいと思った」という感想文もあり、保育者を志望する学生が、〇〇のような保育者に

なりたいたであったり、〇〇の保育をしたいという熱意を持つようになったことは、モチベーションの維持や卒業後のキャリア設計の観点からも重要である。

### おわりに

原・寺谷(2022)では、保育者養成校であるX短期大学で行った「音楽表現」「保育内容(表現I)」「基礎ゼミII(前期)」の3科目を関連づけてALを用いた実践から、音楽表現に必要な技術、子どもの発達段階の理解、そしてアウトリーチ活動により、これまで得てきた技術や理解が深化したことを明らかにした。その継続研究として本論文は、発達センターZにおける「幼児音楽劇の共創」の実践を手がかりとして、X短期大学に在籍している学生たちがALで得た学びを特別なニーズを持つ子どもたちへの保育にどのように活用したのかを明らかにすることを目的とした。

劇づくりの過程では、「意外性」のあるストーリーを書き上げ、ALを用いた実践で音楽表現に必要な技術として身近なものを使って動物のしっぽや耳を作成、発達センターでの劇の上演や子どもたちとの遊びを通して「発達段階」の学びや「子どもたち一人ひとりに個性があり、支援の仕方が違う」という重要な気付きがあった。この発達センターの実践から約1年半が経ち、今、学生たちは幼稚園教員や保育士となっている。これらの学びを活かし、日々の保育実践の中で

さらに新しい発見や展開ができることを期待している。

### 注

\*1 愛知県立大学大学院人間発達学研究科研究生、愛知県立大学教育福祉学部元非常勤講師 \*2 愛知県立大学教育福祉学部客員共同研究員、愛知文教大学・大同大学・名古屋経済大学・名古屋医健スポーツ専門学校・近畿大学九州短期大学通信教育部非常勤講師、NPO法人見晴台学園大学客員共同研究員

### 参考文献

- 別府悦子(2014)「幼児期に特別な配慮を必要とする子どもの実践研究の課題」『SNEジャーナル』(20-1)、23-37頁。
- 古根川円(2017)「保育者養成校における音楽表現活動からの学び—アクティブ・ラーニングから協働へ—」『至誠館大学研究紀要』(4)、17-26頁。
- 佐藤雄紀(2018)「保育者養成校におけるアクティブ・ラーニングを用いたピアノレッスン及び幼児に対する音楽表現指導法に関する一考察」『信州豊南短期大学紀要』(35)、224-250頁。
- 原友美・寺谷直輝(2022)「保育内容の「音楽表現」領域におけるアクティブ・ラーニングにより学生が得た学び—保育者養成校での3つの授業を関連づけた実践を手がかりとして—」『教育福祉学部論集』(70)、49-59頁。